

## 一般教育の英語(3):アクション・ログと自律的学習

高橋 守

### 1. はじめに

最も効果的な英語教授法は、どこにあるだろうか。答を求めてここしばらく、筆者はCBI(Content-based Communicative Instruction)を、実際の授業でどのように展開できるかどうか、試行錯誤を繰り返してきた。2007年度後期からは、遂にこのCBIをTBI(Topic-based Communicative Instruction)という形式を使うことで、授業に取り入れることができるようになった。TBIを使用してみた結果として、これが非常に効果的な教授法であるという感触を得ている。残念ながら、筆者がこれを意識的に使いはじめてからあまり時間が経過しておらず、学生からの反応などを分析して効果を報告するまでには、まだしばらくの時間がかかりそうである。従って、本稿では昨年度から継続して授業に応用しているアクション・ログに関する報告を行いたいと思う。まずアクション・ログと自律的学習との関係について考察を行い、さらにアクション・ログによって教員は何を知ることができたのか、そしてまたアクション・ログそのものについて学生は何を感じたのかを報告したい。

### 2. アクション・ログと自律的学習

2007年度前期末に、筆者は担当するCALLの授業において、成績の上位のほうの6名の学生に口頭でインタビューを行った。この結果、学生たちが、外因性と内因性の両方の動機を持って英語学習に取り組んでいることが分かった。

彼らの半数は、英語学習の目的を将来の職業に就くために必要なものと考えている。これは外因性の、すなわち何か他の目的のために英語学習を行うという動機である。また残りの半数は、英語で自由に意見を述べてみたいと考えている。これは英語学習の目的が、英語そのものの習得自体を目的としており、内因性の動機であると考えられる。昨年度、同様のインタビューを行った時には、職業に就くのに必要だから勉強するという外因性の理由を挙げた学生が半数で、英語で映画を見たり本を読んだりして楽しみたいからという外因性の理由を挙げた学生が、残りの半数であった。

また2007年度には、インタビューした学生の全員が、動機を普通以上に持っているという回答し、その動機を入学時から変わらずに保ち続けてきたと回答した。これらのインタビューの結果として、成績が上位の学生たちは、明確な動機をもって英語学習に取り組んでいることが分かった。

動機に影響を与えたのは何だったかというインタビューの質問に対して、半数の学生は音楽であると答えている。実は、音楽がどのように影響を与えたのかという項目は、このインタビューの質問には含まれていなかったが、インタビューした時点まで、授業中に毎回英語の歌詞の歌を聴かせていたので、授業中の音楽が動機に影響を与えたという回答は筆者は考えている。その他動機に影響を与えたものとして、初めて英語を習った先生と、クラスメートとの会話が挙げられていた。授業中の音楽使用、ロールモデルとしての先生、授業中の英語使用という事柄が、

学習動機に影響を与えていることは、銘記すべきである。

Dörnyei (2001) によれば、これまでに多くの、自律的学習と学習動機の関連性に注目した研究論文が書かれてきた。自ら進んで学習に取り組める学習者の方が、より高い英語の技能を身につけることができると、多くの研究者たちは考えている。教師から強制されるのではなく、学習者が選択する自由を持つことで、自律的な学習環境が整えられ、学生の持っている動機がさらに高まるのである。これをさらに敷衍すれば、自律的学習とは、学習者に動機が備わった状態に、授業内外における学習者の自動的な学習行為を加えたものであると言えるであろう。従って自律的学習の成功・不成功を左右する原因の半分は、学生たち自身が、始めから持っている動機であり、残りの半分は教員が学生たちに与える学習課題に左右されるものであることが考えられる。つまり学生が元々持っている、学習者レベルで動機を左右する要素（言語使用不安や自己効力感など）以外の要素としては、学習場面レベルでの学習課題の興味深さによって、学生たちの動機が左右されると考えられるのである。学習場面での内因的動機を高めるために、筆者の授業では様々な活動を継続的に行わせている。例えば、単語や熟語の意味を教えること、単語や熟語の小テスト、スキーマを高めるウォームアップの活動、ペアおよびグループ活動、個別にコンピュータのクイズに答える活動、授業外の段階別読本の多読活動である。これらの学習課題について逐一述べることは、次の機会に譲るとして、次に筆者が学生たちのアクション・ログから抽出したことを、学習動機の観点から述べてみたい。

自律的学習と英語学習の動機との関係について詳しく述べる前に、アクション・ログとは何だったのかをもう一度振り返っておきたい。アクション・ログとは、①一種のアクション・リサーチである。英語教育においてはアクション・リサーチは調査する話題を決めて行われる小さなスケールの研究である。またアクション・ログは、②学習日誌でもある。それは学生に授業で学習したことを振り返るための丁度良い機会を与える。Dörnyei & Murphy (2003) に示

されているように、基本的にアクション・ログを書かせるには、次の項目を入れて書かせている。それらは、(a)日付、(b)その日の対話の相手の名前、(c)英語を使う目標割合（例えば80%）、(d)英語を使った割合（例えば90%）、(e)その日の授業の評価、(f)自由記述、の6項目である。これらの要素のうち、(e)その日の授業の評価とは、その日の内容が、面白かったか、役に立ったかについて記述させ、その理由も書かせることである。

筆者の担当する一年次開講のCALLIとCALLIIの授業において筆者は、授業が興味深いものであったか、と有益なものであったかの2点について学生たちにアクション・ログを使って継続的に書かせた。この2点についての記述から、学生たちの動機を知ることができたと考えられる。以下に抽出したものは、2006年の後期と2007年の前期に開講された、それぞれ別の学生のCALLのクラスにおけるアクション・ログの全体を集積したデータとして、最も多く見られた質的な記述についてまとめたものである。

学生たちは、どのような時に授業が興味深いと感じたのであろうか。彼らは、英語を使用するときに達成感を得られたと感じた時に、授業を興味深いと感じたようである。例えば、彼らが良く英語を聞き取れた時や良く話ができた時に、授業を興味深く感じたという記述が多く見られた。

他方、学生たちにとって授業が興味深くないと感じたのは、どのような時だったであろうか。学生たちは、自由に物事が進まない時に興味深くないと感じたようであった。例えば、教師や他の学生の言ったことが、理解できなかった時や、コンピュータがクラッシュしてどう対処したら良いか分からない時、同じペアワークのパートナーと何週間も続けてパートナーにされた時などに、授業が興味深くないと感じていた。

次のサンプルは、ある学生（名前は全て仮名）が前期の4月に書いたものである。一瞥すると決意を表しているように見えて、頼もしく感じるが、よく見ると（下線筆者）授業が興味深くないことを表していて、このまま放置するとあとから困ったことになることを暗示している。

April 19 (written April 20, 10:00)  
English Target 75% English Used 80%  
Today's partner: Tetsu  
Comment: There were many word that I did not know. So I need to study these at home. Listening was not good yesterday. I did not forllow (sic) many words. So I need to listen to CD many times at home, too. I thought duet's time was good for me. But it taked (sic) long time a little. I want to speak (sic) faster than yesterday' class by next class.

次は同じ学生が学期の最後に書いたものである。授業のイメージが改善していることが伺え（下線筆者）ほっとさせてくれた。

July 24 (written July 24, 14:31) English  
Target 80% English Used 75%  
Today's partner: Miki  
Today's class is last CALLI class. I think this class is interesting. It was first time to speak English at English class for me. Such class was fresh. Because it is a test, I will firmly revenge it this time. Let's hold out because it will be a test period from tomorrow. I think that it can have so-so done today's course content. I think the listening to have improved than before.

それでは学生たちは、いつ授業が有益であると感じただろうか。学生たちが授業を有益だと感じたのは、授業の中に現実生活で使用される役に立つ表現が、たくさん出てきた時であった。例えば、彼らが自分たち自身の意見を表現することができた時や、道順を示すなどの具体的な表現を使いこなすことができた時に、学生たちは授業が有益だったと感じた。

学生たちが、授業が有益でないと感じたのはどのような時だったであろう。学生たちが、授業を有益でないと感じたのは、教材のレベルが自分の英語のレベルよりも低いと感じた時だっ

たようである。

ここまで概観してきた「興味深い／有益である」の2分法にまつわる具体的な例は、過去2つの学期の間に学生たちが書いたアクション・ログのコメントをファイル化した上で、筆者が抽出したものである。このささやかな調査から、はたして何か興味深い結論が導き出されるであろうか。答えはイエスである。これらの事柄が表しているのは、何が学生たちを動機付けたり、また動機付けなかったりするののかという問に対する答そのものだからである。アクション・ログのおかげで、学生たちの学習に対する動機の状態が分かっただけではない。ログを継続的に書かせることで、学生たちが書く事に堪能になってくる傾向があることが分かった。ただし、多く書く事だけがアクション・ログの目的ではないので、言語使用における意味内容を重視する立場から筆者は、ログの長さを計測することを敢えて行わなかった。ここまでは、アクション・ログそのものから得られたデータに関する質的な分析結果である。次ではアクション・ログそのものを学生たちがどのように感じていたのかについて述べたい。

### 3. アクション・ログ自体についてのアンケート調査

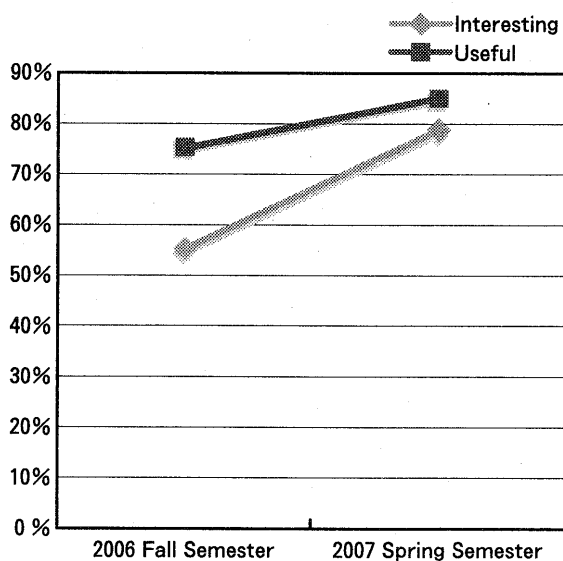
2006年度後期と2007年度前期の最後の授業時に、CALLの授業に於けるアクション・ログの使用そのものについて、アンケート調査を行った。以下に記す質問と学生からの回答は、全て英語で行ったが、意味を伝えることが目的であるので、本稿では日本語で結果を記す。(a)毎授業時間後にアクション・ログを書く事は、興味深いことでしたか。(b)毎授業時間後にアクション・ログを書く事は、あなたの英語習得に役立ちましたか。という2つの質問をした。

2006年度には、学生たちのアクション・ログを書く事に関する意欲は、あまり芳しくなかった。授業の初期のあたりで学生たちは、「真剣に取り組めます」という内容のことを多く記した。従って筆者は、アクション・ログを書く事が気に入ったのであると思った。ところが予想とは逆に、最後のアンケート結果では、きわめ

て否定的な反応が示された。学生たちのたった55%しか、アクション・ログを興味深いと感じなかったのである。アクション・ログが、英語習得に役立つと感じたのは、辛うじて75%であった。この数字に現れたのは、アクション・ログに対する学生たちの感情的な反応だったと考えられる。アクション・ログは、半数の学生たちにとって退屈で楽しくない活動と見なされていたことが、ここからは読みとれるのである。

ところが2007年になると、学生たちの反応が違って来た。78.8%の学生がアクション・ログを興味深いと感じ、84.7%の学生がアクション・ログを役に立つと考えたのである。

2006年度と2007年度では、教え方にどのような違いがあったのだろうか。2007年度には、より多くのインプットが行われていた。2007年度に学生たちは、より多くの多読用の読み物を読んで、沢山のレポートを提出した。2006年度には、1学期間に5冊の読書とレポートが課されていたが、2007年度には、12冊の読書とレポートに増量されていた。



また読書量の増加に加えて、アクション・ログの提出の仕方も変更された。2006年度は、学生たちはノートに手書きでログを書いて提出したが、2007年度は、全てのアクション・ログを学生たちは、Moodleのジャーナル機能を使って作製かつ提出した。

結論的に言うと、これらの結果から導きだされることは、インプット仮説 (Krashen,1984) とアウトプット仮説 (Swain,1985) の正しさ

である。2007年度の学生たちは、多くのインプットとアウトプットを行った。2006年度よりも遙かに課題が多く、能力を試される場面が増えたにも関わらず、2007年度の学生たちは、難しい課題に自ら進んで取り組んだ結果として、アクション・ログへの興味が増したのである。

もう一つこの結果から導きだされることは、Moodleのようなバーチャルな学習環境を通してアクション・ログ活動を行わせたことが、極めて効果的であったということであった。バーチャルな環境を使って、短い英文を多く書くことのほうが、携帯で日々メール交換を行っている世代にとっては、紙とペンで文章を練り上げることに比べて取り組み易い活動だったと考えられる。

多読のレポートを提出する活動にせよ、サーバ上にコンピュータを使ってメッセージを残す活動にせよ、教師の指導のもとに提出を求められているものではある。しかし多読のための本は、100%個人が自由に選択できたのであり、多読は自律的な要素の強い活動である。メッセージに使用する英語にしても、学生がコンピュータを自由に操作しているという自律性と、学生がこの活動を肯定的に見ていることは、無縁ではないと思われる。ここからも、自律的学習の有効性が示唆されるであろう。

本稿を執筆している学期 (2007年後期) は、筆者がアクション・ログを授業に使用し始めてから3度目のセメスターである。本セメスターでは、アクション・ログに少し変更を加えた。前学期までは、アクション・ログを書くためにこちらから学生に課題として与えた質問は、その授業が「興味深いものだったか」と「役に立ったか」であった。これらの質問に限定して回答させることにより、学生たちが興味を持って授業に取り組んだかどうかを、回答から一目で判断することができた。つまり質問を「興味深いものだったか」等の項目に限定することにより、アクション・ログは、学生たちがどのような動機で学習に取り組んでいるかを、教えてくれた。ところが同じ質問を繰り返しているうちに、だんだん学生たちも書く事がなくなってきてしまうことに気がついた。そこで今学期は、学生たちにガイドライン (資料参照) を与えて、授業

の始まる前に、それらの中から1～2文をノートに書き出させ、アクション・ログ記入時に授業を振り返る時の手掛かりとなるようにした。またMoodleの機能として、当初は日誌機能を使ってアクション・ログを書かせていたが、日誌機能の場合は教師のみが閲覧できるので、コメントを書く事自体が、膨大な仕事量となることに加え、本来コミュニケーションの授業として尊重されるべきはずの学生相互の交流もできないことから、今学期からはフォーラム機能を使ってアクション・ログを書かせることに変更した。

このようにガイドラインにそって学生たちにアクション・ログを記入させ、それらの発言に対して相互にコメントを書かせはじめたのだが、実際にやってみると思いもなかったことが起きるようになった。

例えば一人の学生が、「私は級友や先生に対して、はっきりと聞こえるように話をした。」と書いたとする。次の学生は、「嘘を言っはいけない。」2人目の学生は、「君は嘘つきである。」3人目は、「君は、はっきりと話してはいなかった。」と書くような現象が起きることが分かった。自由に書き込みをさせた場合には、教師の側が意図していなかったような、やや低次元とも言えるこのようなやりとりが、行われるようになるということに驚かされた。

しかし、肩の力を抜いた気楽な英語のおしゃべりに何の害があらうか？むしろこれは、英語使用の観点から非常に歓迎すべき現象なのではないかと考えるようになりつつある。この現象は、まだはじまったばかりであるので、今後もアクション・ログの使用を続けた上で、このような現象と英語習得との関係について稿を改めて報告を行いたい。

#### 4. おわりに

本稿では、2006年度後期と2007年度前期のCALLの授業で使用したアクション・ログを通して学習者の動機を分析することにより、アクション・ログが自律的学習の状態を把握する道具として活用できることを示した。

まずはじめに、成績の上位に位置する学生た

ちの学習動機に関するインタビューの結果を分析した。上位に属する学生たちに共通していたのは、入学時から学習動機を普通以上に保ち続けていたことであった。また内因的動機を高める活動として、授業に英語の歌を使用することが有効であることが示唆された。

次に、アクション・ログと自律的学習の関係について述べた。学習者に動機が備わった状態に、授業内及び授業外における学習者の自動的な学習行為を加えたものが、自律的な学習の正体ではないだろうかということである。

続いてCALLの授業で学生たちが書いたアクション・ログを通して、学習動機を分析した。学生たちは、英語を使った達成感を得られたと感じた時に、授業を興味深いと感じていた。また自由に物事が進まない時には、授業を興味深くないと感じた。教材のレベルが自分の英語のレベルよりも低いと感じた時だったようである。また教材のレベルが自分の英語のレベルよりも低いと感じた時には、授業が有益でないと感じていた。

最後に2006年度と2007年度の学生たちが、アクション・ログそのものについてどう感じていたのかを、アンケートを通して分析した。2006年度には、約半数もの学生がアクション・ログに興味を感じなかった。ところが2007年度には約80%近くの学生が興味を持ったと回答した。この違いは、おそらく2つの年度の授業のやり方の違いによると推測された。2007年度には、CALL教室にMoodleサーバを導入し、学内からはどこからでもオンラインでアクション・ログを書くことができる環境になった。また2007年度は、前年度と比較して2倍以上の量の英文を多読させた。これらが示しているのは、インプット仮説 (Krashen, 1984) とアウトプット仮説 (Swain, 1985) の正しさであると推察された。また自律的学習の有効性も示唆された。

本稿では、アクション・ログを継続的に書かせることにより、学習者の学習動機が把握できることを示す事ができた。またアクション・ログを書かせる時の指示を調節することで、学生たちが思っていることを柔軟に英語で表現できるようになることが分かってきたことについて述べた。

我々教員が、学生にアクション・ログを書かせる際には、焦って高度なことを要求しないよう自戒すべきである。筆者が担当した学生たちの英語は、同年代に属する英語母国語話者と比較すると、語彙の点でも、一度に理解することのできる英文のサイズの点でも、レベルが桁違いに異なる。日本人学生は、学習者としてのみ英語を使用しているのであるから、これは当然のことである。母国語として使用するのではない限り、学習者が実用的なレベルに達するほど多くの時間を英語使用に費やすことは難しいのが現実である。むしろレベルが多少低くとも自然な言語使用が行われていることを、我々は喜ぶべきではないだろうか。幸いなことに、本学の学生たちはアクション・ログを通して自分の学習を振り返ると同時に、毎回英文を書く練習を積み重ね、また多読を通して、理解可能なインプットを継続的に続けている。日本語に訳読させる教授法に使用される教材に比べると、筆者の担当する学生が使っている英語は、低レベルではないかという印象を持つ人もいられるかもしれない。しかし、かつて訳読のみでどれほど多くの人が英語を実用的に使えるレベルまで磨き上げることができたであろうか。Nation (2007) がいみじくも述べた通り、理解可能なインプット、すなわち英語習得にダイレクトに結びつく英語のインプットは、学生たちが98%の英語を理解していなければ実現が不可能なのである。単語の98%を知っている英文を読むことによるのみ、英語習得が可能となるということが真理である限り、一足飛びに英文解釈の難問に取り組ませて英語習得をさせようとするには、かなりの無理があると言わざるを得ない。冒頭にも述べたが、CBI (Content-Based Communicative Instruction)、その中でも特に TBI (Topic-Based Communicative Instruction) という強力な方法を使うことで、訳読をさせずに英文の内容を理解させ、さらに英語で発表することができるようにさせることが可能となる。TBIについての実践報告は、また稿を改めて行いたい。

## 参考文献

### Books

- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press
- Dörnyei, Z. & Murphy, T. (2003). *Group dynamics in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press
- Snow, M.A. (2001). Content-based and immersion models for second and foreign language teaching. In M. Celce-Murcia (ed.), *Teaching English as a second or foreign language* (pp.303-318) Boston: Heinle & Heinle
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In *Input in second language acquisition*, edited by S.M. Gass and C.G. Madden. New York: Newbury House.

### Journal Article

- Krashen, S.D. (1984). Immersion: Why it works and what it has taught us. *Language and Society* 12, 61-64.
- 鈴木裕子 (2000, December). 高校の授業でのアクションログについて, *Learning Learning* 7. Retrieved December 1, 2007 from <http://coyote.miyazaki-mu.ac.jp/learnerdev/LLE/7.1/actionJ.html>

### Unpublished paper presented at a meeting

- Nation, I.S.P. (2007, November). *How large do our learners' vocabularies need to be?* Paper presented at the meeting of the Japan Association for Language Teaching, Tokyo, Japan.

### 資料

Student number: \_\_\_\_\_ Name: \_\_\_\_\_

Course Guidelines STUDENT LIST

In this class, I will

(Speaking)

1. \_\_\_\_ ask questions and let my classmate know that I don't understand what she/he said.
2. \_\_\_\_, in a small group discussion, agree or disagree with my classmates' or my teacher's opinions.
3. \_\_\_\_ start a discussion in a small group, stay on a topic, politely interrupt my classmates or my teacher.
4. \_\_\_\_ ask my teacher or classmates to explain if I don't understand something in a lecture, or on a tape or video.
5. \_\_\_\_ discuss the information in a lecture, or on a tape or video.
6. \_\_\_\_ use my lecture notes to tell my classmate the main ideas of a lecture.
7. \_\_\_\_ speak English clearly enough, so that my classmates and teacher will understand me.
8. \_\_\_\_ maintain eye contact with my classmates when I talk with them.
9. \_\_\_\_ speak in a natural manner.

(Listening)

9. \_\_\_\_ follow directions given in English.
10. \_\_\_\_ take notes during the lecture.

11. \_\_\_\_ copy everything the teacher writes on the board during a lecture into my notes.
12. \_\_\_\_ understand what words like *as a result, however, first, then, finally*, mean and show the meaning in my notes.
13. \_\_\_\_ notice when the teacher explains new vocabulary in a lecture. Write the new vocabulary words and their meaning in my notes.

(Writing)

14. \_\_\_\_ write a few sentences at the beginning of the class as a pre-action-log activity. I will use this guidelines as a resource.
15. \_\_\_\_ write my action log at the end of the class.
16. \_\_\_\_ spend time thinking about the topic.
17. \_\_\_\_ gather and organize information by using notes, reading, and making lists.

(Reading)

18. \_\_\_\_ read to identify meaning rather than words.
19. \_\_\_\_ read title.
20. \_\_\_\_ use glossary.
21. \_\_\_\_ analyze unknown words.